

エッセイ

異文化コミュニケーション研究と私

— これまでを振り返って —

Looking Back at the Pursuit of Intercultural Communication Studies:
A Personal Narrative

灘光洋子

Yoko NADAMITSU

Abstract: This essay describes my journey in the field of intercultural communication studies, with unforgettable experiences along the way. This personal narrative is organized into two sections; the first half is about the days I spent as a student in the United States, and the latter half is about my professional life in Japan. I have been always interested in the conflicts and communication issues that arise when people from different cultures interact. Here *culture* is understood broadly to include not only national or ethnic cultures but also class, and professional cultures, like those that become salient in doctor-patient communication. I use qualitative analysis of communication phenomena such as personal stories and interactions among people, with the primary goal of exposing the underlying realities of everyday life. There were four turning-points in my career; studying abroad for the first time, receiving intellectual guidance from Dr. Gudykunst and Dr. Ting-Toomey, conducting qualitative research with Chinese nationals living in Japan for a Ph.D. dissertation, and teaching in a graduate program. As I was writing this essay, I realized how much I owe to the many mentors, colleagues, friends, and family members who have supported me throughout my career. I dedicate this article to each of them.

9

1. はじめに

異文化コミュニケーションという領域は、海のように広く深い。「差異」の表象や意味づけ、

「文化」という概念の恣意性や政治性、「コミュニケーション」行為の実践や現象を射程に、複数の学術分野が横断的にかかり、豊かで多層的な研究を可能にしてきた。研究者によって、自分の現位置も、見える景色も、目的地も違うことだろう。異なる文化的背景の人たちが関与するさまざまなコミュニケーションの諸相を対象に、その背後にある何かを探り、私たちがあたり前のようにとらえている前提を可視化することに異文化コミュニケーション研究の意義があると、私は思っている。

異文化コミュニケーション研究は、第二次世界大戦後のアメリカで発展してきた。日本に紹介され広く知られるようになったきっかけは1972年に国際基督教大学で開催された異文化コミュニケーション研究会で、同大学を中心とした研究や教育の影響も大きかった（石井，2001）。1980年にコンドンとユースの著書『異文化コミュニケーション』、1987年には「異文化コミュニケーション：新国際人への条件」が刊行され、異文化コミュニケーション論の入門書として大きな役割を果たした（丸山・吉武，2011）。本格的な広がりを見せ始めたのは1980年代後半になってからのことである（久米，2009）。この分野を専門的に学ぶ体制がまだ整っていなかった頃、アメリカに渡って異文化コミュニケーション論を学び、研究者としてのトレーニングを受けた人は多かったのではないだろうか。「異文化コミュニケーション：新国際人への条件」の著者である石井、岡部、久米を第一世代¹とするなら、私の世代は、異文化コミュニケーション研究を志した第二世代といってよいかもしれない。

今でこそ、西南大学、南山大学、立教大学、青山学院大学などのキリスト教系私立大学を中心に、異文化コミュニケーション系の教育プログラムが展開されているが、かつての博士号取得者は、アメリカの大学院で学んだというケースがほとんどだったのではないかと思う。私の知る限りでは、この領域には、なにがしかの職業を経験したのちに、学究の道を志した人が多い。また、博士課程で共に学んだ日本人留学生の大半は、しばらくはアメリカの大学で教えたとしても、最終的に日本の大学で教鞭をとるという道を選択している。私も例外ではなかった。社会人を経験し、若干行き当たりばったりの選択であった時も含め、結果的には、学部を含めると、アメリカで4つの大学を巡り、博士号取得後は、帰国して3つの大学に奉職した。

このたび、退任するにあたって、来し方を書いてみるという場を頂戴した。この機会に、そのような異文化コミュニケーション研究畑を歩んできた第二世代の研究者・教育者の一人として、これまでの道のりを振り返ってみたい。このエッセイでは、アメリカでの留学生生活、帰国後の大学教員としての日々を、関心をもった研究テーマや個人的なエピソードも交えながら、綴りたいと思う。

2. 留学生としての日々

アメリカでの留学生生活は、連続はしていないが通算すると7年半になる。学部生としてテネシー州で1年、大学院修士課程はアリゾナ州で2年半、博士課程はカリフォルニア州に半年、その後オクラホマ州で3年半近くを過ごしている。一貫して、コミュニケーション系の学部在籍した。

初めての留学は1980年、行き先はテネシー大学だった。いわゆるバイブル・ベルトと呼ばれる地域で、キャンパスには、教会だけでなく、sorority（女子学生社交クラブ）やfraternity（男子学生社交クラブ）が何軒も建ち並んでいた。1年間の留学だったが、所属学部はSpeech & Theatreで、ここで初めてコミュニケーション分野の授業を受講した。確か、対人コミュニ

ケーション論ではなかったかと思う。日本では受けたことのない内容で、学生同士のディスカッションが頻繁に行われていた。ヨーロッパやアジア諸国からの同年代の学生たちも多く、International Houseが催す集会やイベントを通して、英語母語話者でない者同士、結構仲良くなったものだ。父の友人を通して紹介された植物学者のご夫婦が親代わりとなっていていろいろな面でサポートしてくださり、ありがたいことだった。最初はアメリカ人家庭に下宿していたのだが、キャンパスから遠かったために寮へ移ることにした。アメリカ人の家族や学生との共同生活は、自分のあたり前を疑い、身体化されていた「好ましいコミュニケーション・スタイル」について考える貴重な経験となった。自分にとって自然な対人関係の築き方や交渉の仕方とは明らかに、また時に微妙に異なる周りとのやりとりで、ざらつきを覚え、同時に、なぜ思いを言葉にすることが躊躇^{ためら}われるのか、どうして相手に同意しないことに不安を覚えてしまうのか、そもそも自分が何を考え欲しているのかを突き詰めないことが習性になっているのではないかなど、自問自答することがよくあった。最初は、ルームメイトが聞いているラジオの音量を下げてもらう要求すら、遠慮してできなかったのだから。

2度目の留学先がアリゾナなのは、全くの偶然だった。1987年のことである。テネシーから帰国後、原爆放射能の影響を継続的に調査する広島市の医学研究所で通訳・翻訳に携わっていたが、夫の仕事の関係で、アリゾナに行くことになったのである。この地で、Dr. William B. Gudykunst と Dr. Stella Ting-Toomey の導きがなければ、異文化コミュニケーションという領域に踏み入ることはなかった。Dr. Gudykunst は不確実性減少理論 (Uncertainty Reduction Theory) や不安・不確実性管理理論 (Anxiety/Uncertainty Management Theory)、Dr. Ting-Toomey はフェイス交渉理論 (Face Negotiation Theory) で知られる研究者である。私がアリゾナ州立大学で修士課程を始めた時は、まさに実証主義的な異文化コミュニケーション研究の盛んな時期であった。当時のアメリカの異文化コミュニケーション研究を牽引していたといっても過言ではない二人との出会いは、その後の私に大きな影響を与えた。学際性と実践性、ジャンルを超えて隣接領域の知見を取り込む懐の深さを兼ね備えた異文化コミュニケーション論は、テネシー留学を通して気づかされた自分自身の枠組み、さらには帰国後に思いもかけず経験した居心地の悪さなど、自分の異文化体験を解明する切り口を与えてくれるように思えたのである。

日本の研究者との共同研究も多く、親日家でもあった Dr. Gudykunst と香港出身の Dr. Ting-Toomey は研究に忙殺されながらも、大学院生の指導に熱心で、ちょうど、離婚と母の死に向かい合うという局面にあった私は、精神面でも随分支えていただいた。幸い、Teaching Assistant (TA) のポジションを得、Small Group Communication というクラスを教えたが、これは教師の立場から、アメリカ (アリゾナといったほうが適切かもしれない) の良くも悪くもマイペースな学生気質を知るまたとない機会となった。TA といっても、アメリカでは、学部の基礎科目を担当し、実際に教壇に立って教える。教員としての権限を与えられ、授業運営も職務も一般の教員と変わらない。相部屋の講師室と専用の机が与えられたこともあって、TA 間の仲は良く、一緒に食事をしたり、悩みを相談し合ったりと、何かと助けられた。

修士論文のテーマは、通訳者を介したコミュニケーションの特徴と通訳者の役割であった。医学研究所での経験から、異文化・異言語の仲介を担う通訳者の重要性はよくわかっていただからだ。データを収集するため、クラスメートや地元の通訳者に協力を仰ぎ、そのやりとりを記録し、事後インタビューを実施した。これが初めての研究・調査の経験だったが、どのような調査も、対象者を含め、協力してくれる人なくしてはできない営みなのだと痛感したのもこの時である。

博士課程では、転校もした。1992 年秋に一旦入学したのはロサンゼルス (LA) にある南力

リフォルニア大学だったが、翌年の1月には、オクラホマの州立大学に移籍した。財政面で必要だったアシスタントシップを取れなかったことが転校の直接の理由だが、暴動が起きた直後のLAの荒れた雰囲気もしっくりこなかったのだろう。オクラホマ大学に移ったのは、異文化適応研究で著名なDr. Young Yun Kimがいたこと、そして、そこならTAのポジションがあるとわかったからである。

オクラホマ大学のコミュニケーション学部では、初めて現象学や解釈学にふれ、主観と客観、理解、解釈するということについて、実証主義的な見方とはかなり異なる視座に、目を見開かれる思いだった。確か、Doctorial Comprehensive Examination（博士論文執筆資格試験）の課題の1つは、「異文化コミュニケーションを解釈学の視点で論じよ」だったと記憶している。異文化コミュニケーション関係の入門書や論文に違和感を覚えるようになったのもこの時期である。国籍で文化集団を切り分け、アメリカ人（多様であるにもかかわらず）を参照枠として、日本人、中国人、韓国人を一括りにしたようなコミュニケーションの比較研究が多いように思われたからだ。従来のアメリカ主導型の異文化コミュニケーション研究は、西洋対東洋といった二元論的枠組みから対象をとらえ、東洋＝集団主義＝高コンテクスト・コミュニケーション・スタイルといった図式のもとに調査されたもので占められていた。博士論文のテーマを、「中国人にとって日本人のコミュニケーションスタイルはどのように映っているのか」としたのは、そのような当時の異文化コミュニケーション研究の傾向に一石投じたいとの思いからだった。

データ収集のため一時帰国した私は、人の紹介を通して、いわゆるスノーボール方式で、インタビューに応じてくれる中国人を一人ひとり訪ねて回った。一介の大学院生にしかすぎなかった私に、無償で多くの人が協力してくれた背景には、彼らに私へのある種の共感があったような気がしてならない。「灘光さんも留学生なんですね」と言われたこともあり、互いに異国で学ぶ留学生という共通の土壌がラポールを醸し出していたのかもしれないと思う。インタビューが、聞き手と話し手が共に意味を紡ぎ出す共同作業である以上、調査者の立場は、当然話し手に影響する。大学のセンセイであったなら、彼（女）らの語る内容や語り方すら違っていたかもしれない。アメリカに戻り、在日中国人の語りをどのように分析したらよいか悩んでいた時、指導教授だったDr. Ling Chenから勧められたのがStrauss & Corbin版グラウンディッド・セオリー・アプローチ（GTA）だった。文字化した語りと何度も向き合い、分類し、概念化するプロセスは時間と根気を要したが、話し手もおそらくは意識していないだろう背後にある前提、規範や秩序、さらには社会状況などが、語られたテキストと結びつき、道筋が見えてきた（と思えた）時は、快感を覚え、語りを解釈し分析する質的研究を面白いと感じる瞬間だった。

従来、異文化コミュニケーション研究は、実証主義的研究が主流で、質的・解釈的アプローチによる研究は、普遍性に欠ける、客観性に乏しい、事例にすぎないとの批判にさらされてきた。しかし、1980年代後半頃から解釈的アプローチによる研究が登場するようになり（河合, 2011）、博士論文に取り組んでいた時は、いわゆる「主観的」といわれていた人々の語りや会話などの私的語りも、分析対象となるとの見方が定着しつつあった時期と重なる。

方法論への関心はつねにあった。博士課程において方法論は必修で、質的研究法として「会話分析」を、量的研究法としては「統計学」を履修した。ちょうど、受講した会話分析はエスノメソドロジストのDr. Laurence Wiederが担当しておられた。とてもユニークな先生という以上の印象はなかったが、かなりあとになって、彼の書いた刑務所でのコード実践に関する卓越した論文²に接し、もっと教えを乞うておけばよかったと後悔したものである。

統計学は社会学部が提供していたクラスを1年間受講した。統計の基礎知識を学び、SPSSを

中心とするソフト（今のような使いやすいプログラムとは比べ物にならない初期のもの）を用いて、地元の住民を訪ね集めたアンケート調査結果を分析するという実践型の授業だった。対象者はランダム・サンプリングで、電話帳を繰って無作為に抽出した住民に電話でアンケートへの協力を仰ぎ、一軒一軒訪ねて回るという、気の遠くなるような作業であった。訪ねた先でいきなり拳銃を突きつけられたらどうしよう、などという不安が無いわけではなかったが、幸い大きな危険には合わずにすんだ。折しも、オクラホマで連邦政府ビルが爆破されたのはこの頃であった。約束を反故にされることは数回あったにせよ、これは得難い経験となった。興味を覚えたのは、項目に対し1から7までの数字で回答してもらうアンケートの内容より、むしろ出逢った一人一人の話や背景であった。たとえば、初めてキリスト教原理主義者の家族と話をしたのも、この調査を通してだった。ごく一般的な家族構成（夫婦と子供二人）の穏やかで協力的な若いカップルが、話を聞き進めていくうちに、思いもかけず、「聖書に書いてあることはすべて本当に起きたことなのです」と自らの信仰についてふれた時は、書物でしか知らなかった彼らの存在に初めて輪郭と色が与えられたようで、妙に興奮したことは今でも鮮明に覚えている。質的な研究に私の志向が傾いていったのも、このような経験が無縁ではなかったと思えるのである。

博士課程を通して、Dr. Chenには励ましていただいた。私は彼女にとって初めての博士論文指導学生で、年齢的にも近かったのではないと思う。何かにつまづくたびに、研究室を訪ねたが、いつも暖かく迎え入れてくださった。卒業後も、何度かお目にかかったが、変わらぬ包容力と明るさで接してくださるDr. Chenには感謝しかない。

3. 大学教員としての日々

13

1996年に博士号を取得したのちに帰国し、教員として3つの大学を経験した。それぞれ、環境、体制、雰囲気はかなり異なる職場だった。

初めて専任の大学教員として奉職したのは、千葉の九十九里浜から車で約30分の新設大学だった。開設されたばかりの人文学部国際交流学科おもにコミュニケーション領域のクラスを担当した。当時の記録をみると、異文化コミュニケーション論、言語コミュニケーション論、非言語コミュニケーション論、現代コミュニケーション論、通訳の基礎など、英語科目を含めると、一学期に8科目を教えている。印象に残っているのは、大きな階段教室に廊下まで溢れんばかりの学生を抱えていた、週2回開講の「異文化コミュニケーション論」である。マイク片手に、頻繁に階段を駆け上がり、エネルギー全開で学生たちに接していた。忙しくはあったが、博士号を取得した直後で勢いと活力もあり、専門の科目を教えることは喜びだった。この若い大学には、新しい分野を取り入れようとする先駆性があったように思う。学生たちは人懐っこく、ゼミを含む小規模クラスでは、学期末に打ち上げと称する飲み会が恒例で、それを楽しみにしていたのは、学生よりむしろ私のほうだったかもしれない。

新設校の常として、頻繁に各地の高校や語学学校を訪問し、大学をPRするのも大切な任務の一つだった。同年代の教員が多く、周りは畑という自然溢れる環境で、大学近辺に住む同僚たちとは、外国人教員を含めよく集まってはホームパーティなど開いたものだ。関東圏に基盤のなかった私にとって心強い職場仲間だった。ここで人生の宝ともいえる友人に出会えたことは、何にもまして幸運なことだった。

異文化・異言語の仲介者である通訳者への関心は強く、帰国後は、法廷通訳者への聞き取り調査に取り組んでいた。人の流動が盛んになるにつれ、外国人裁判も増加していた。そのような裁

判に欠かすことのできない通訳者の役割はきわめて重要であり、厳密なまでの正確性を求められる制度化されたやり取りの中で、どのように言語・非言語を含む文化的差異をとらえ、裁く側と裁かれる側の橋渡しをしているのか、当事者の思いを聞きたいと思ったのである。法廷通訳者の勉強会や外国人裁判の傍聴など、関係があると思われる集いに足繁く出かけていく以外に、関係者と接触し、協力を仰ぐ術はなかった。同時に、母の闘病を通して垣間見た医者と患者、患者家族を含めたコミュニケーションの在り方に疑問をもったことをきっかけに、医療の場でのコミュニケーションも研究してみたいと考えていた。視点の違い、アイデンティティの交渉、権力格差などが絡む医者と患者（側）の相互作用に、異文化コミュニケーションと重なる要素を見たからである。「文化」は、他者を参照枠として立ち現れ、意識される関係性の概念との視点に立てば、異文化コミュニケーションとは異なる集団／属性を背景とした対人コミュニケーションの延長にあるといってよい。研究者会議³で知り合った医療関係者の紹介で、医療者のコミュニケーション教育に取り組む医師を訪ねたことをきっかけに、さまざまな医療関係の会に顔を出すようになった。医者のコミュニケーション・トレーニングに模擬患者として参加したこともある。患者に関する守秘義務の問題もあり、この領域での調査は門外漢にはなかなかハードルの高いものだった。

東京にある私立大学に移ったのは、最初の大学に就職して9年後のことだ。正門の櫓並木が美しい伝統校だった。職位にかかわらず教員は皆同じサイズの研究室を与えられており、それは驚くほど広かった。担当科目数は少なく、研究サポート体制も整っていた。同僚たちは、皆、個性豊かで、一国一城の主の風格を備えていた。私は初めての異文化コミュニケーション系教員だったらしい。英語科目のIntercultural Communicationはあったものの、専門科目としての異文化コミュニケーション論は設置されていなかった。手探り状態ではあったが、次第に学科の教員との交流も増え、4年後に他大学に移る時には、同僚の一人が企画する出版プロジェクトに参加するほど馴染み、打ち解けた関係になっていた。学生たちは皆真面目で、とくに異文化コミュニケーションという新しい領域に関心を示し、積極的に学ぼうとするゼミ生たちの姿は大きな励みだった。3年生と4年生と一緒に学ぶ形式で、いつも20名以上が集うゼミだったが、ここでも彼（女）らと、教室ではふれることのない話題で盛り上がった恒例飲み会は懐かしい思い出となっている。一軒では話し終わらず、場を変えてまた話し続けるなどということもあった。

研究の射程を、通訳者、そして医療の場のコミュニケーションに据えていた私は、この時期に医療通訳者へのインタビューを始めている。医療通訳者の現状には、仲介人としてのマージナルな立ち位置、二重の権力格差（医者と患者、異文化／言語）を内在したコミュニケーション、グローバル化がもたらす日本社会の制度的・構造的課題が交錯していると思われたからである。医療通訳者が生まれた背景には、言語、文化、制度の面で不利益を被りやすい外国人患者の健康と福利を守るという考えがあり、中立であるべきとされる通訳者の立ち位置とは若干異なる要素がある。日本では、少しずつ制度化が進んではきているが、NPOや国際交流協会など医療機関以外の団体や部署が派遣する医療通訳者も多く、彼らはボランティアと呼んで差し支えない待遇におかれている。そのような医療通訳者の立場、役割、心情について、NPOに登録する通訳者にインタビューし考察を試みた。この調査のために参加した会合や会議、トレーニングなどで、声を上げて社会に働きかけようとしている人たち、問題意識をもった医療関係者、外国人患者のための活動を実践しているNPOスタッフ、実践を軸に研究の道に入る人たちに接したことは、研究成果として論文を発表するだけでなく、どのように、そしてどの程度、アクティヴィスト的な社会実践に関与をしていくべきかという研究者の立ち位置について考えさせられる機会でもあつ

た。共感や問題意識の共有はあるが、入り込み過ぎないよう距離を保ちつつ、対象者を切り分け、分類し、理解可能な形に語りをデータ化し、解釈し、類型化するという研究スタイルが一般的で、私もそのようなスタンスだったからである。調査過程では、勿論、当事者の方々が研究者を受け入れてくれるということが大前提だが、同時に、研究者が対象と同一化することなく、どれだけコミットすべきかが問われることになる。

1990年代から批判的アプローチによる研究が異文化コミュニケーション領域でも登場し（河合, 2011）、研究者の立ち位置や、研究における主体・客体の捉え方、研究のもつ権力性が盛んに議論されるようになってきていた。そのような異文化コミュニケーション研究における新しい動きの影響も当然あっただろう。研究手順や分析における研究者自身の視点や枠組みだけでなく、研究者の当事者性について考え始めた頃であった。

3つ目の大学は、蔦の絡まる煉瓦造りの校舎があるキリスト教系大学だった。異文化コミュニケーションという名称を冠した学部と研究科が設立されており、このことが決め手となって、動くことを決意した。当時の研究科は社会人対応であったため、夜間の授業が中心で、帰宅が深夜近くになることも稀ではなかった。翌日の朝に学部科目を担当する時は、大学近くのホテルに宿泊したものだ。土曜日には、修士課程1年生全員と全教員が一堂に会する方法論を中心とした必修科目が開講されていた。社会人学生の便宜を図ってのことだが、教員は学会や研究会への参加が難しくなり、スケジュール調整に苦慮せざるをえない状況でもあった。大学院生は皆、意欲的で、これまで以上に多忙な毎日を過ごすこととなったが、大学院生を教えるという経験を通して得たものは少なくない。異なる経歴をもつ彼（女）らの関心はじつに多様で、指導するにあたって、私自身の視野をさらに広げる必要があった。加えて、隣接領域の同僚たちの洞察に富むコメントや豊富な知識からも多くを学ばせていただいた。

この間、質的研究方法として、GTAだけでなく、ナラティブ・アプローチへの関心が深まったのは、社会構築主義に学んだことが大きい。また、障害学という分野と出会ったのはこの頃だったと思う。ろう者を、身体的欠損という観点でとらえるのではなく、手話を母語とする文化的マイノリティに位置づけた論考（木村・市川, 2000）からも刺激を受けた。ろう者と健聴者の関係を異文化コミュニケーションの視点（マイノリティ/マジョリティ、スティグマ、アイデンティティなど）から考えてみることは充分可能で、たとえば、アメリカの異文化コミュニケーション入門書 *Intercultural Communication: A Reader* (Samovar, Porter & McDaniel, 2012) には障がい者と健常者のコミュニケーションを文化の視点から論じた章に紙面が割かれている。ただ、ろう者／ろう文化をあたかも一枚岩であるかのように捉え、健聴者／健聴者文化と二項対立的に置いてしまうと、難聴者や中途失聴者の存在がよくみえてこない。たとえば、幼児期から口話教育を受けてきた難聴者が第2言語として学ぶ手話は、ろう者が母語とする手話とは異なる日本語対応手話である場合が多い。一方、補聴器等を用いても聴こえの問題がすべて解消することは難しく、健聴者と同じ土壌で音声言語を使いこなすことにも困難が付きまとう。このようなろう者と健聴者の狭間にある難聴者のアイデンティティの葛藤について知りたいと思うようになった。背景には、難聴者の甥の存在がある。社会との接点が増える青年層を対象とした調査を計画したが、当時の研究記録をみると、かなり苦労していたことがうかがえる。関係者や支援スタッフにコンタクトし、難聴者を紹介してもらおうよう依頼しても、受け入れてもらえないことが続いた。そのうち、ようやく協力者が現れ、並行して実施していた医療通訳コーディネーターへのインタビューも順調に進み始めた。そんな日々を送っていた私に、やがて転機が訪れる。

大切な人たちの闘病と死、そして目の病を得るという体験を、ほぼ同時期に味わうこととなっ

たのである。目を痛めたことは、研究をするにも、職責を全うする上でも、多くのことを私に突きつけた。個人的な体験を題材にして分析を試みるオートエスノグラフィーという手法に目が向くようになったのはそんな時のことだ。今回、この一連の体験をオートエスノグラフィーで表現し、分析してみたいという気持ちに駆られたが、断念した。この方法論に埋め込まれている、情緒面に踏み込んだ自己開示にリスクを覚えたからだけではない。渦中であって、混沌とした思いを言葉に置き換えることは容易ではなかった。また、自分の直接体験に根ざした知と、研究者の分析する視点を結合させて書くということは、どのような文体にするかも含め、思いのほか難しかった。この実験的な手法に挑戦するには、もう少し時が必要なようだ。

4. おわりに

本エッセイでは、これまでの道程を個人的出来事も交えながら振り返ってみた。仮に、違うテーマ（たとえば、家族、別れ、病など）で書いたとしたら、かなり違った自己像が浮かび上がっていたことだろう。小林（2018）は、ディルタイ（1981）が人は人生を考察するにあたって「記憶をたどりながら、生涯の過ぎ去った部分を結ぶ関連をその意義の範疇によってとらえる」（p.170）と記した箇所と言及し、自己の人生とは、人生全般をどのように意味づけるかによって選択した過去の「点」（部分）と「点」（部分）を結びつけて描いたものだと言っている。今回、複数の「点」を結ぶ「意義の範疇」となったのは異文化コミュニケーション研究だった。

こうして一つひとつを思い起こす中で、大きな「点」が4つあったことに気づかされた。契機といってよいかもしれない。まず、自分の内面に刻まれていた規範を改めて見つめ直し、揺すぶられたという意味で、テネシーへの留学が挙げられる。2つ目はDr. GudykunstとDr. Ting-Toomeyとの出会いである。異文化コミュニケーション研究という未知の領域に導いてくれた最初の師であった。3つ目は、質的研究の面白さと大変さを教えてくれた在日中国人へのインタビュー、そして4つ目は大学院教育に携わるという経験である。多様な大学院生の指導を通して、学術的なことだけでなく教育面でも鍛錬されたように思う。

久米（2009）は、自身の退任記念論文の中で、これからの異文化コミュニケーション研究の展望として、（1）アジア近隣諸国（中国、韓国など）（2）パワー（権力、特権と不利益など）、（3）共文化（ジェンダー、職業、立場、世代など）を射程に入れることを提唱している。この尊敬する先輩が照らす航路から大きく外れることなく、進んでこられたのだろうか。これまで、問題意識に沿ったテーマについて、当事者や関係者にお話をうかがい、文献を手繰り、知りたいことや疑問に対する解を自分なりに探すという営みを繰り返してきた。大学業務と折り合いを付けつつ、時に止まり、漂い、自分なりの（その時点での）答えを出し、また進むという、小舟で大海に臨むがごとき旅だったような気がする。

この度、このような機会がなければ、これまでの月日を改めて振り返ることはなかっただろう。なんと多くの人たちに助けられてきたことかと改めて思う。書きながら、何度も、これまで出会ったかけがえのない人たちの顔が脳裏に浮かんだ。終盤の数年間、思い描いていたような研究生活を送ることが難しくなってしまったが、周りの人たちのありがたさが身に沁みる日々でもあった。読みたくて読めていない本たち、そして手元にある幾つかの未完の原稿と、これからゆっくり付き合っていくことにしよう。航海は、まだ続くのだから。

註

1. 久米昭元氏は、2016年に開催された立教異文化コミュニケーション学会（通称RICS）の基調講演で、石井敏氏、岡部朗一氏に加え、上原麻子氏、林吉郎氏、遠山淳氏を日本での異文化コミュニケーション研究創成期における主要な研究者として紹介している。
2. ウィーダー, D. L. (1987)「受刑者コード：逸脱行動を説明するもの」『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』（山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳）（pp. 167-232）. せりか書房 [原著：Wieder, D. L. (1974). *Telling the code. In Roy Turner (Ed.), Ethnomethodology* (pp. 144-172), Penguin]
3. 当時、南山大学で定期的に行われていたコミュニケーション研究者会議である。

参考文献

- ディルタイ, W. (1981)『精神科学における歴史的世界の構成』（尾形良介訳）以文社. [原著：Dilthey, W. (1910). *Der Aufbau der Geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*.]
- 石井敏 (2001)「第1章 研究の歴史的背景」石井敏・久米昭元・遠山淳（編著）『異文化コミュニケーションの理論』（pp. 10-18）. 有斐閣ブックス.
- 河合優子 (2011)「第3章 アイデンティティ」日本コミュニケーション学会（編）『現代日本のコミュニケーション研究：日本コミュニケーション学の足跡と展望』（pp. 119-125）. 三修社.
- 木村晴美・市川泰弘 (2000).「ろう文化宣言：言語的少数者としてのろう者」『ろう文化』現代思想編集部（編）（pp. 8-17）青土社.
- 小林多寿子 (2018)「自己を語ること・人生を書くこと：ともに書く自分史の世界」小林多寿子・浅野智彦（編）『自己語りの社会学：ライフストーリー・問題経験・当事者研究』（pp. 107-133）. 新曜社.
- 久米昭元 (2009)「異文化コミュニケーション研究の歩みと展望：個人的体験と回想を中心に」『異文化コミュニケーション論集』7, 29-43.
- 丸山真純・吉武正樹 (2011)「第1章 異文化コミュニケーションの歴史」日本コミュニケーション学会（編）『現代日本のコミュニケーション研究：日本コミュニケーション学の足跡と展望』（pp. 104-110）. 三修社.
- Samovar, L. A., Porter, R. E., & McDaniel, E. R. (2012). *Intercultural Communication: A Reader*. (13th ed.). Boston, MA: Wadsworth Cengage Learning.